

## ベートーヴェンのヴァイオリン・ソナタ

### ヴァイオリン・ソナタ 第3番

ベートーヴェン最初のヴァイオリン・ソナタ集である作品12（全3曲）は、アントニオ・サリエリに献呈された。「第3番」になると、楽曲構成が一段と大きくなる。主題の対比が見事で表現の幅も広がり、ベートーヴェンの作曲技法の長足の進歩を感じさせる。変ホ長調という調性は《皇帝》や《英雄》と同じだが、ヴァイオリンにとって決してやさしい調性ではない。しかしそれだけに、柔らかな含みのある響きが生まれ、豊かな感情表現を獲得している。人間には誰も「飛躍の時期」というものがあるが、彼にとって1797年から99年にかけての数年がその時期だったのであろう。1800年にはいよいよ「交響曲第1番」が書かれる。そして耳の病気を自覚し始めたのもこの頃である。色々な意味で本曲は、作曲家ベートーヴェンにとって一つの転換点となった作品と言える。

### ヴァイオリン・ソナタ 第7番

「第7番」は、ベートーヴェンにとってまさしく《運命》的な調性の「ハ短調」で書かれている。内面の葛藤やヒロイックな感情の起伏がモザイクのように組み合わせられ、いかにもベートーヴェンらしい悲痛さと雄大さを併せ持つ、堂々たる作品である。「ハ短調」作品に傑作が多いのは、彼の激しい気質がこの調性に向いているからかもしれない。

### ヴァイオリン・ソナタ 第9番《クロイツェル》

本作は、ベートーヴェンのヴァイオリン・ソナタのなかで最高傑作と言われるだけでなく、古今東西のヴァイオリン・ソナタのなかでも特別の地位を占める作品である。出版されたのは1805年だが、彼はこの頃、交響曲第3番《英雄》、ピアノ・ソナタ第21番《ワルトシュタイン》、同23番《熱情》といった傑作を次々と生み出しており、作曲家として脂の乗り切った時期だった。作曲者自身、「ほとんど協奏曲のように」と書き記しているだけあって、華麗な演奏効果、ダイナミックな曲想、典雅な美しさと雄大なスケールを備えた作品に仕上がっている。特に第1楽章の冒頭、ヴァイオリンが決然と重音のソロを弾き出す部分からは、この曲に賭けるベートーヴェンの強い思いがひしひしと伝わってくる。当初はイギリスの名ヴァイオリニスト、ジョージ・ブリッジタワールのために作曲され、1803年5月24日ウィーンでベートーヴェン自身がピアノを弾いて初演されたが、なぜか作品を献呈されたのは当時、盛名を馳せていたヴァイオリニスト、ロドルフ・クロイツェルであった。しかし当のクロイツェルは、この曲をついに一度も演奏しなかったという。